

『和泉式部日記』の予兆 —「呉竹の」の歌をめぐる—

高野 様子

The Omen in *Izumi Shikibu Nikki*

- Researching a Waka “Kuretake no” -

Sachiko Takano

This paper about *Izumi Shikibu Nikki* discusses “mujo-kan” and the omen. “Mujo-kan” is a Buddhistical term, and attitudes of the heart are frequently given representation in the classics in Japan. Emptiness, loneliness, a wish to escape from reality, and so on, is called “mujo-kan”. Woman and Miya in *Nikki* had each been through the mill. That’s why they became aware of “Onaji-Kokoro” (which means “Same Spirit”.) that one another possessed and felt an attraction and fell in love with each other. And they were richly endowed with a natural ability in waka. They made the most of their natural talents between them, so their love was cultivated by the waka. “Mujo-kan”, the omen in their future, and love at present, waka between Woman and Miya are expressed in the world in *Nikki*. In this paper I especially prove waka, “Kuretake no”, since I regard it as an including factor in the above-mentioned.

—

^{*1}『和泉式部日記』（以下、『日記』とする。）は、和泉式部と冷泉院皇子である帥宮敦道親王との恋の様相を綴った作品である。こんにち、『日記』はその文学的屬性として日記文学に配されているが、わずか十か月ほどの日次に二人の間に贈答された147首もの和歌が収載されており、そのことがこの作品が他の日記作品とは大きく異なる点の一つとなっている。古今に比肩なき女流歌人である和泉式部を描いた作品として、まことに似つかわしいものであると言える。

『日記』における和歌贈答は、和泉式部たる〈女〉と宮との心の練り上げていく過程におけるモチーフであり、また具現化された二人の心象そのものであった。^{*2}小町谷照彦氏は、これら和歌の持つ言葉の記号性、つまりはイメージによって触発される叙情を「和歌的秩序」と定義づけられた。日記はこの和歌的秩序のもと、和歌に内包される世界を二人の愛情の営為に預けていったのである。

また、『日記』内の内容構造について、宮崎荘平氏は^{*3}「構造されたプロットに沿って、プロット優先の立場で編成される」とし、そのことが傑出した和歌贈答の頻度のみならず、「それが作品形成に先立って構成されていたとみられる点において、（他の日記文学作品とは）大きく異なっている。」（括弧内の補足は稿者による。）と論じられた。氏は作

品を三部構成とみなし、〈女〉と宮との恋の発端から、〈女〉の宮邸入りまでを第一・二部、宮邸での記事を第三部と定義されている。そして、和歌贈答は〈女〉が宮の邸に引き取られるくんだり、すなわち第二部終章とともに姿を消す。〈女〉の呼称の消失や物語的叙述法など、それ以前とは作品形態が大きく異なる第三部の幕開けとともに作品から和歌が見られなくなるという事実は、『日記』が確固としたプロットをもって著されたという宮崎氏の説を裏付けるものである。

『日記』が構成を意識して編まれた作品であること、そしてそこには「和歌日記」とも言えるほど多くの贈答歌が収載されていること、これらはそれぞれ『日記』における最大の特徴であり、そして各々は互いに無関係ではあるまい。その折その場面における和歌の贈答は、和泉式部と帥宮との客観的事実としての行為を超えた、作者の意思が介在しているとみるべきである。なぜならば、さきに述べたように、和歌こそが〈女〉と宮との愛情を運んだものであり、『日記』の流れの中軸の役割を果たしているからである。

そのように『日記』の骨子を成す和歌群の中で、本稿では作品最後に配された和歌贈答に着目する。それは、以下の二首を含む場面である。

いかにおぼさるゝにかあらん、心細きことどもをのたまはせて、「猶世の中にありはつまじきにや」とあれば、

呉竹の世々の古事おもほゆる昔語りはわれのみやせん
と聞えたれば、呉竹のうき節しげき世の中にあらじとぞ
思ふしばしばかりもなどのたまはせて、人知れず据ゑさ
せ給ふべき所などおきて、慣らはである所なればはした
なく思ふめり、こゝにも聞きにくゝぞいはん、たゞわれ
行きてゐていなん、とおぼして、十二月十八日、月いと
よきほどなるに、おはしましたり。

小町谷氏は、^{*4}『日記』における和歌贈答のパターンについて、現実では見られない特異な形式のものが散見されるとし、それを五種に類別されている。

- (1) 〈女〉の側からの贈答
- (2) 複数歌の贈答
- (3) 初句揃えの贈答
- (4) 古歌を借用した贈答
- (5) 情念の鍵語を反復させた贈答

「呉竹の」の歌は^{*5}『古今和歌集』（以下、『古今集』とする。）の「くれ竹の世々の古事なかりせば伊香保の沼のいかにして思ふこゝろを述べへまし〜」（巻19・雑体歌・1003・壬生忠岑）を典拠しており、古歌を借用しての和歌贈答ということになる。したがって、『日記』最後の贈答歌をこのパターンに照らし合わせると、(3)(4)が該当する。

この時代の平素には、女性の側からのアプローチはなされない。和歌贈答においてもまた同様である。すなわち、(1)「〈女〉の側からの贈答」は心理的緊張や切迫した事態が起因となってなされる。『日記』における「呉竹の」の場面では、和歌贈答は〈女〉の側からなされているが、贈答以前のこととして『猶世の中に〜』とあれば」となっており、これは宮からの消息文と考えられるので、(1)のケースには該当しない。ただし、和歌による語り掛けは〈女〉の側からなされているので、(1)に準ずる扱いとみなしてよいだろう。

(3)の「初句揃えの贈答」は、二人の心情が緊密な連携を持ち、同じ和歌的世界観を発露した際に行われるものである。

そして、『日記』の主人公たちに限らず、いにしえの雅人たちが多く用いたのが、(4)「古歌を借用した贈答」であろう。周知の古歌は和歌的秩序を持ち、叙情を醸し出す有用な手立ての一つである。『日記』の二人は、これを贈答に用いた。培われてきた古歌の和歌的世界観を、二人の間に移築させたのである。

小町谷氏によると、『日記』においてこれらに分類される

贈答は、いずれも〈女〉と宮との愛の節目節目に置かれているという。「呉竹の」の場面は、前述の通り第二部末宮邸入り前の『日記』最後の贈答にあたり、形骸的な節目にあたる。それを外的因子とするならば、『日記』の深淵部に拠る内的因子としては、この頃唐突に宮が出家遁世の意志を開陳したことが挙げられるであろう。換言すれば、外的な節目は作品構成に関わるものであり、宮の出家の言とそれにまつわる和歌贈答が内的な節目ということになる。さらに、『日記』は作者が作品構成を意識して形成されたものであるということをも前提とした。構成を意識しているからこそ、作品内容の節目において、その内実である二人の心象を司った和歌贈答が、重要な役割を果たしているのだともいえる。

確固とした構成企図を持って生み出された『日記』において、和歌贈答はどのような役割を化せられたのであろうか。とりわけ、『日記』最大の節目とも言える第二部末に「呉竹の」の贈答が配置されたのは、作者にどのような目論見があつてのことなのだろうか。

それではまず初めに、「呉竹の」の和歌贈答に関わる場面として、『日記』の作品構造のこの外的・内的な節目の狭間に描かれた宮の出家遁世の意向について論じていきたい。

一

宮邸入り前における宮の出家意思の吐露は、『日記』の流れからして、鈴木一雄氏曰く^{*6}「坐りのわるさ」を呈している。作者による作品の構成意図を疑うほど、奇異な感があるのである。

当時の皇族貴族のならいとして、〈女〉も宮もこれまでそれぞれが胸の内で〈女〉の宮邸入りについて煩悶してきた。それをついに宮が口にしたのが十月の「手枕の袖」の折である。前述の特殊な贈答形式をほとんど覆っているこの贈答歌群—(1)(2)(4)(5)に充当する一は、疑いなく〈女〉と宮との愛の節目に際して行われたものであると言える。これを節目とする根拠は、「手枕の袖」贈答の中で宮が、

「いとかくつれづれにながめ給ふらんを、思ひおきたることなけれど、たゞおはせかし。」

と、初めて〈女〉に具体的に宮邸入りの話を持ちかけることに示されている。「手枕の袖」の詠み合いを通して〈女〉と宮の共感が信頼感となり、二人の情念は高まっていった。そし

て、これ以降二人の恋の在り方は宮邸入りという現実的なかたちをもって進んでいくのである。

以後も宮邸入りすることへの〈女〉の迷いや不安は度々見られ、その都度二人の仲は揺れ動く。しかし、ともかくも二人の恋に貫き描かれた『日記』において、恋が一つの方向性を持ったことは、二人の仲がポジティブな姿勢を持ちえたことであると言えるであろう。

ところが、それからおそらく一か月ほどの後—『日記』のこのあたりは日次矛盾が著しい箇所である—、突然に宮が出家意志を〈女〉に打ち明ける。

その夜おはしまして、例の物はかなき御物語せさせ給ひても、「かしこにゐてたてまつりて後、まろがほかにもゆき、法師にもなりなどして、みえたてまつらずは、本意なくやおぼされん」と心細くのたまふに、いかにおぼしなりぬるにかあらん、又さやうの事も出で来ぬべきにや、と思ふに、いともあはれにてうち泣かれぬ。

二人の恋が昇華に向かっている折も折、このエピソードには前述した通り、突飛な感が否めない。出家とは俗世を捨て、煩悩を捨てるよう精進することである。恋という、最も俗世的な懊悩の世界に生きていこうという決心とは、まったく表裏になる意思なのだ。

それでは、宮が道心を持つことがそれほどそぐわないのかというと、そうではない。むしろ、宮は求道心を深く持つ若者であったことが、彼の生い立ちから分かっている。

帥宮の生い立ちに関わる厭世観や求道心については、^{*7}森田兼吉氏の諸高論に詳しい。父母にまつわる禍々しい風聞、同腹兄の弾正宮為尊親王をはじめとするゆかりの人々の夭折、これらは帥宮の心の影となり、厭世観を与え、帥宮を求道心の深い人間に育てていったのかもしれない。

また、『日記』内に見える帥宮の無常観として、^{*8}森田氏は冒頭部の小舎人童の言葉に注目されている。

「その事と候はでは、なれなれしきさまにやとつゝましう候ふうちに、日ごろは山寺にまかり歩きてなん。いとたよりなくつれづれに思ひたまうらるれば、御代りにも見たてまつらんとてなん帥の宮に参りて候ふ」とかたる。「いとよきことにこそあなれ。その宮はいとあてにけしうおはしますなるは。昔のやうにはえしもあらじ」などいへば、(後略)

小舎人童の現在の主人は帥宮であり、従者である小舎人童が一人気ままに寺詣でを「日ごろ」行うことはあり得ないことである。したがって、主人である帥宮のお供で山寺に参詣・参籠していたとするのが自然であろう。また、「日ごろ」「まかり歩き」という語から、参詣・参籠していた場所が単一の、特定の山寺であるとは考えにくい。これらの類推から、森田氏は「この日ごろ山寺歩きに精を出している帥宮の姿をこそ読み取るべきであろう。」とされている。山寺歩きの候補地としては、弾正宮の葬儀が行われたことからおそらく菩提寺ともなったであろう雲居寺、太皇太后昌子の墓所観音院、帥宮の母超子や叔母詮子の墓所である木幡などが考えられる。各所はいずれも山寺といえる場所にあった。帥宮は自分の魂の救済と、近しい人々の慰霊のため、それらゆかりの山寺を歩き回っていたのであろう。

そして、その「ゆかり」行脚の一環として、宮は〈女〉のもとをも訪ねたのではあるまいかとわたくしは考えている。小舎人童の言葉は、宮の「ゆかり」を懐かしみ、悼み、仏に帰依する心を〈女〉に感じさせた。そのような宮の求道心や無常観を察した〈女〉は、宮に共感し、「いとよきことにこそあなれ」と返す。〈女〉の無常観は『日記』中に「つれづれ」「はかなし」などの感慨をともなつて度々見られるが、宮のそれも作品冒頭から表出されているのである。そして、小舎人童の「日ごろ」の行動の背後に宮の無常観を見つけ、共感する〈女〉がここにいる。

『日記』には「同じ心」という言葉が登場する。〈女〉と宮とが互いの心情を共感し、思いを分かち合っているさまを述べたものであり、二人が望む心の在り方を表した語として用いられている。『日記』冒頭部はまた、これより二人が目指した「同じ心」を、〈女〉が宮の中に最初に見出したときでもあるのだ。

『日記』には、さきの小舎人童や宮の通いに従う右近の尉のように、〈故宮〉の旧臣たちが帥宮の従者として登場する。これについて^{*9}秋澤互氏は、「故宮の旧臣を丸抱えにする動作の中で」の流れであり、「故宮没後の一連の動きの中で必然」と説かれている。〈故宮〉の旧臣たち同様、〈女〉は宮邸入りと同時に宮の召人となるわけであり、結果的に小舎人童や右近の尉と同じように、宮とは主従関係になる。しかしながら、この『日記』冒頭部において、宮が〈女〉へ贈った橘の花から想起される「昔の人」を悼む和歌的世界観や、小舎人童の言辞を通して漏れ聞く宮の仏道志向から類推するに、宮は

〈女〉を〈故宮〉「ゆかり」のものとして捉えていたのであろうと思われる。それは、「日ごろ山寺歩きにまか」る心象に等しく、身近な人々のゆかりの場所を訪ねる宮の鎮魂の思い、無常観に触発されてのものであった。〈女〉と宮との恋のたゆとうさまを描いた『日記』は、同時にその始発から二人の無常観をも包含していくことになるのである。

これまで述べてきた、恋と厭世観が「同じ心」で共存していくという考えは、一見背反した心象に思われる。宮の「ゆかり」の寺詣でと、「ゆかり」の〈女〉へ橘の花を贈ることは、別次元のことであるというむきもあるかもしれない。

これについては、前述の鈴木^{*10}一雄氏が詳細に検討されている。「手枕の袖」に前後して、『日記』は和歌贈答が地の文の散文部分を駆逐するようになり、家集的な色合いが濃くなる。これは宮と〈女〉との関係に大きな変化がない証左であり、「手枕の袖」で〈女〉の宮邸入りの計画が具体化したことと重なる。

そこにふいに宮の出家意思の言が降って来る。那边が「坐りのわるさ」なのか。鈴木氏は次の三点を挙げておられる。

- (a) 作品全体の流れ（二人の恋を『日記』の主流とみる。）からして、宮の出家の意思発露（鈴木氏はこれを傍流とみる。）は唐突。
- (b) 宮の出家・厭世観は第二部末で二度断続するが、主流と交錯しつつ不連続で叙述されている。
- (c) 第二部末に突如出現した宮の出家の言が、その後作品に影を見せることなく消えてしまう。

そして、この各々について鈴木氏は内容的に矛盾のないことを例証している。それらを総括すると、「手枕の袖」における宮の

「行なひなどするだに、たゞ一人あれば、同じ心に物語聞えてあらば、慰むことやある、と思ふなり」

という言葉に帰結されるであろう。ここに、さきに述べた「同じ心」が見られる。すなわち、『日記』の主流に立つ二人の恋が目下目指しているものは、〈女〉が宮邸入りをし、二人で日々の生活を始める事である。一方、傍流である「行なひ」をする宮の姿もまた、日々の営みの中のものである。したがって、恋も求道も宮にとっては等しく日常化していくものであり、「宮にとって、同じ宮邸入りが二人で『おこなひ』につとめる生活であったとしても、別に異様でもなければ、矛盾でもなかった」のである。むしろ〈女〉の宮邸入り目前の

この時期だからこそ、「同じ心」を求めるがゆえに宮は仏道的志向を打ち明けたのだと考えることができよう。

ここまで述べてきたように、宮はその生い立ちから厭世観・求道心が強く、それらは作品内でも度々暗示されてきていると分かった。様々な経験を経た宮が、潜在的に無常観を抱いた者として成長したならば、それがそのときその折、ふいに現実を生きる宮の口から漏れたとしても何ら不思議はないのである。したがって、〈女〉の宮邸入りという作品の外的因子としての節目に、宮の厭世観という内的因子が置かれても、作品の構成上不都合はないということになる。

しかし、近親者の相次ぐ死に怯え、この世に無常観を抱えているのは客観的事実としての宮の像である。それは、『日記』という文学作品の中には表出してこない、現実の帥宮である。前述の『日記』冒頭場面や、諦観的な〈女〉を宮が慰める言葉など、作品の端々にて宮の無常観は感得される。しかし、実在の帥宮像をヴィジョンから外し、『日記』を単一の文学作品として捉えた場合、これら厭世観は宮の出家の意思発露の場における説得力を欠いてしまう。出家を志向するほどの理由づけが、作品中に乏しいのである。

また、宮と〈女〉との共通の「ゆかり」である〈故宮〉の死も、宮による突然の厭世観の開陳に、直接には関わらないように思われる。そもそも〈故宮〉の存在自体、『日記』において冒頭部を導くきっかけという役割に過ぎず、後の展開からはその存在がすっぱりと消えてなくなってしまう。これほどに印象の薄い、いうなれば『日記』において脇役に過ぎない〈故宮〉の存在が、宮の出家意向を促すものであるとは言いがたいのである。

これらの理由により、『日記』という文学作品において、第二部末で突如宮が出家意思を打ち明ける必然性が、その背景からすると、やはり弱いとわたくしには思われる。作品としての構成を意識すると、まさに「坐りがわるく」なってしまうのである。

また、恋と同義の日常的な「行なひ」をすることと、実際に出家をすることとは、まったく異質のことである。^{*11} 小松登美氏は、①俗体の男女、②出家した男女、③子ども、という当時の人間の分類法の一つを挙げ、出家することは名前、容貌、居住など、生活様式のすべてにおいて別の世界の人間に変わるのだと述べておられる。別世界の人間に変わることを、宮邸で日々の「行なひ」をすることを、同じベクトルで〈女〉が捉えられようはずもない。〈女〉が宮の意向を聞き、驚愕するのも無理なからぬことなのである。したがって、

その気色を見せていた宮の厭世観は、出家の理由としては利用できないということになる。

以上、「呉竹の」が交わされた『日記』の内的な節目として、作品全体から宮の無常観の表出を見てきた。外的な節目である第二部末に突然宮の厭世観を述べることは、一見必然性がなく、奇妙ですらあることが、再確認されたと思う。

しかしながら、ここで重要なことは、客観的事実としての実在の帥宮がこの節目で厭世観を告げたのはなぜかということではなく、この節目に宮の厭世観を描くことで作者が何を伝えたかったのか、そのことである。つまり、作者による明確な構成意識のもと、作者のたなごころにいる宮が出家開陳という行動を起こすことで、作者は何を企図していたのかということの問題にすべきなのである。「日記」という語を冠していることで、エピソードの偶然性という概念に寄り掛かり、作品に現れた必然性という、作者の意図を探ることを怠ってはならない。

『日記』は日記ではなく、日記文学である。日記文学は書きたいこと、書くべきことを作者が現在の視点で積極的に取捨選択する権利を持ち得ている。そしてそのことはとりもなおさず、虚構性を容認することが前提となっているのである。

『日記』の特徴である「日次矛盾」や「超越的視点」は、この虚構性を容認する立場から立脚するものである。作品形式に明確なプロットを持っていたと目される『日記』作者が、敢えて「坐りのわるさ」をも辞さず、外的節目に宮の出家の意図を配した。そしてそこに、作品の最終贈答歌として「呉竹の」の贈答を選び採った。なぜだろうか。

ここに、一つの仮定が導かれる。それはすなわち、「坐りのわるさ」も作者による構成意図に含まれるのではなかろうか、ということである。第二部末に突如宮の出家の意思を描写した。そこには、作品の流れを混乱させ、混乱させたところに作者が得たかった何物かが存在するのではなかろうか。この仮定をもとに、次項での考察を行いたい。

三

前述のように、宮が厭世観を述べた折に作者は、「いかにおぼしなりぬるにかあらん」「いかにおぼさるゝにかあらん」、「心細くのたまふに」「心細きことどもをのたまはせて」と、同様の言葉を重複して使っている。これについて、^{*12} 鈴木一雄氏は、「『日記』の形成意欲の衰弱に起因し、単位贈答歌連続配列という方法に依るもの」とであるとされている。

行きつ戻りつしている二人の仲が作品としての進行を妨げ、それが作者の執筆意欲の減退を生ぜしめた。結果、作者手控えの資料の羅列に終始し、地の文がやせ細ってしまったというのである。

第二部末の和歌贈答群から見られる構成企図については、別の機会のまた論じたいと思う。わたくしが今ここで着目したのは、宮の厭世観が述べられるその都度、作者が「いかにおぼさるゝにかあらん」様の叙述を用いていることである。作者の執筆意欲減退が原因となって、宮の出家の言辞による〈女〉の驚愕の叙述に、修辞上の冗漫さをもたらしたとしても、〈女〉が宮の心を理解できずに動揺しているという、その一事に変わりはない。そこで、宮の気持ちををはかりかねて、「いかにおぼさるゝにかあらん」と混乱する〈女〉の心象を考えてみよう。

宮が最初に〈女〉へ「法師にもなりなどして」と意向を打ち明けたときは、「いかにおぼしなりぬるにかあらん〜と思ふに」とあるので、宮と同じ時間を生きていた当時の〈女〉の気持ちとして読み取れる。他方、「呉竹の」の贈答の場面では、「いかにおぼさるゝにかあらん」という挿入句が宮の消息文に先んじ、文頭に來ている。この技法で、宮の気持ちを理解できない〈女〉の動揺した心象が一層如実に表現されているが、ここでは「いかにおぼさるゝにかあらん」が〈女〉の気持ちであるのか、または執筆している現在の作者のいぶかしさを語ったものなのか、判断しかねる。宮の厭世観の発露には、はやくには^{*13} 清水文雄氏が「これらの言葉や歌の表象には、すではっきりと『死』の予感がにじみ出ている。」とし、『日記』執筆時にはこの世にはない宮の運命を予兆していると説かれている。日記文学における予兆は、作者が過去の客観的事実を全知全能の立場で掌握し、それを租借嚙下して内的真実を獲得しつつ、あるいは獲得し得たときにこそ表象される。したがって、この場合宮の心を理解できずに驚愕するのは作者であってはならない。作者は宮の厭世観の発露の所以を理解し、その表象の必要性を思ったからこそ、『日記』のエピソードとして選び採ったのである。以上の理由から、ここも〈女〉の心中思惟とすべきである。

〈女〉は出家の意思を語る宮の気持ちが理解できない。なぜならば、〈女〉は宮邸入りを控え、今、最もポジティブな時期にいるからである。宮の具体的な宮邸入り勧誘があった後も、〈女〉は迷っていた。つれづれを慰め、艶聞への疑惑を晴らすメリットとともに、和歌贈答によって築いてきた二人だけの世界の消失、愛という無形のものに己の人生を賭す

事への不安などのデメリットの存在の大きさに、踏み切れな
いでいたのである。しかし、方違え先で宮と明け暮れをとも
に過ごした〈女〉は、「心のどかに御物語起き臥し聞えて、
つれづれもまぎるれば、参りなまほしき」と願う。『日記』
中、〈女〉が最も積極的に宮邸入りを欲する箇所である。曖
昧な気持ちは依然として引きずってはいるものの、〈女〉の
思いは前向きに傾いてきている。『日記』冒頭部の〈女〉の
姿と比較すると、さらに分かりやすいだろう。

夢よりもはかなき世の中を歎きわびつゝ明かし暮ら
すほどに、四月十余日にもなりぬれば、木の下くらがり
もてゆく。築土の上の草青やかなるも、人はことに目も
とゞめぬを、あはれとながむるほどに、近き透垣のもと
に人のけはひすれば、誰ならんと思ふほどに、故宮に候
ひし小舎人童なりけり。あはれにもののおぼゆるほどに
来たれば、(後略)

ここでは、どうしようもなく漠とした中に女の姿がある。
「人はことに目もとゞめぬ」ほどの普通の日常の中にあるか
らこそ、誰とも分かち得ない孤独感に沈むのである。

しかし、〈女〉は宮を知り、和歌の贈答を重ねる。宮から
の多情の嫌疑に苦しみ、途絶え途絶えな宮の訪れを切なく思
い、紆余曲折しつつも二人で積み重ねてきた愛情の時間は無
為ではなく、やがて〈女〉の宮邸入りが具体化してくる。そ
れは、「つれづれもまぎるれば」といった二人の持つ根源的
な寂寥をともなったものではあるのだが、「人はことに目も
とゞめぬを」というわが身一人の孤独感ではなく、〈女〉と
宮との「同じ心」を基調とすることで、例えば「物語聞え」
などするとき「慰むことやある」と言っているのである。
『日記』冒頭の厭世観から和歌贈答を媒介とした二人の恋へ、
そして宮邸入りへと、〈女〉にとっては「夢よりもはかなき
世の中」を「同じ心」をもって生きていける相手を、『日記』
のこのときに至ってようやく獲得し得た、そんな時期なので
ある。

ところが、その相手は出家の意思を〈女〉に吐露する。前
項で詳述した通り、宮も〈女〉と同様にその登場から無常観
を持つものとして作品に描かれている。そして、〈女〉との
恋を経て、恋人の宮邸入りをひかえている身である。〈女〉
とプロセスを等しくしてここまで愛情を交わし合い、〈女〉
は宮との「同じ心」を信じて自分の人生を預ける決心をした
ところなのである。

さらに、鈴木^{*14} 雄氏は、〈女〉の無常観や孤独感が『日記』
冒頭部の感傷に基点を置くものとし、〈女〉が救われがたい
孤独感に陥ったとき「冒頭の心境にたちもどってしまう」と
述べておられる。はたして、〈女〉は宮の出家の意思、厭世
観を聞いた折、そのいずれにも「心細くのたまふに」「心細
きことどもをのたまはせて」としている。何に対して〈女〉
が心細いと感じているのであろうか。ひとつに、これから寄
り添い、ともに生きていこうとする宮が彼岸の人となり、
〈女〉の手の届かない存在となってしまうだろうという将来
的なことに対して心細いのであろう。そしていまひとつとし
て、宮との「同じ心」の在り方を信じてきた〈女〉が、根源的
には理解し合えてはいないのだという二人の気持ちのずれ
を痛感し、心細さを感じたのではなかろうかとわたくしは考
えるのである。〈女〉は宮の言辞に動揺し、「いかにおぼしな
りぬるにかあらん」と理解しがたい名状を述べている。この
期に出家をいい出す宮にうろたえ、そして宮の言葉を受け止
められない自分自身にうろたえているのである。

そして、ここで想起されるのが、宮の無常観と恋愛観との
相関関係である。宮にとって、宮邸における〈女〉との生活
は、ともに求道していくことでもあった。この出家意向が宮
にとって現実化しないものであったことは、宮のプロフィー
ルで見るとおりである。おそらく、宮は出家を無常観と同義
で口にしたのではなかろうか。現代でも、もちろんその気が
ないにもかかわらず、「もういやだ、死にたい。」と思わず漏
らしてしまうことは、誰にでも心当たりがあるだろう。そし
て、執筆している『日記』の作者は、そのことにすでに気づ
いていたはずである。しかしながら、『日記』の中の〈女〉、
換言すればこのときの〈女〉は気づかなかった。そして、〈女〉
は冒頭部の孤独の心象へ還ってゆくのである。

二人が「同じ心」をもち、互いを求め合っているながらもそれ
に気づかず、分かり合えていないのだと思ひ込み、〈女〉は
一層心の闇に陥っていく。そんな〈女〉をみつめつつ作者は、
結局人と人とはすれ違い、どこまでも理解しあうことはでき
ないものであって、孤独な存在なのだと感じたに違いない。
『日記』における〈女〉と、『日記』を著す作者と、それぞ
れの感じる孤独感は異なるが、二人の抱くはかなさが作品の
行間から感じられる。そして、それゆえに、第二部末には作
品の流れに混乱が起こるのである。宮邸入りという愛情の昇
華の前に、敢えて宮の無常観を置いたのには、人生を愛情に
賭すことのはかなさ、虚しさを、来るべき二人の生活の予兆
として作者が読者に伝えたかったからにほかならない。それ

は、愛し合い、求め合っていたとしても、人はどこまでも「個」で「孤」なのである、と作者が語っているものだとわたしは考えているのである。

それでは、「呉竹の」の贈答は、この作者の主張にどのように絡まってくるのであろうか。

和泉式部ほどの和歌じょうずであるから、おそらく宮邸入り後も二人の和歌贈答は行われていたのに違いない。しかし、作者は『日記』における二人きりの愛情交歓が終わる第二部を節目として、和歌贈答を消失させた。そして、その最後の贈答として選ばれたのが「呉竹の」の和歌である。〈女〉の側から贈答された「呉竹の」の歌は、^{*15}『和泉式部集』(以下、『家集』とする。)にも所収されている。

なほ世にもありはつまじきことのたまはすれば

(430) 呉竹のよよの古事おもほゆる昔語りは君のみぞせん

『家集』では結句が「君のみぞせん」となっており、『日記』の「われのみやせん」とは異なっている。『家集』所収の『日記』歌は64首あり、うち『日記』歌と語句相違のある歌は45首を数える。『日記』と『家集』と、それぞれいつ頃の成立か、またどちらが先んじるかという問題は改めて一稿論じるべきものであり、ここでの追究は控え、論点を「呉竹の」の和歌のみに絞りたい。

^{*16} 千葉千鶴子氏の考察によれば、『日記』『家集』両所収歌四五首のうち、i・誤写によるもの二十首、ii・意図的な推敲、改作によるもの二五首、そのうち「呉竹の」の歌は後者に分類される。呉竹は「世(よ)」また「節(よ)」にかかり、厳しい冬にも枯れずに緑であることから永遠の連想を呼ぶ。『日記』における〈女〉側からの「呉竹の」の歌意は、「時代時代を経てきた古歌を思わせる私たちの思い出は、私一人で語るといえるのでしょうか、いいえ、これから二人で一緒に。」というところであろう。

ところが、これが『家集』の「君のみぞせん」になると、意味合いはまったく異なってくる。本稿は三条西家本をテキストとして用いているが、応永本も『家集』同様「君のみぞせん」とされており、こんにち、三条西家本が最良の伝本との声が高くとも、^{*17}『日記』における「呉竹の」の原型を「君のみぞせん」に求める向きも見られる。その所以として、宮が「猶世の中にありはつまじきにや」ともらした厭世観へ答えるための贈答であること、また〈女〉よりも宮のほうが若

年だった—『日記』の舞台となった長保5(1003)年当時、天元4(981)年出生の宮は22歳、和泉式部の出生年については諸説あるが、康保3(966)年説から天元2(979)年説まで、そのいずれにしても宮の出生年より先んじていることから—と考えられること、これらの理由により、「われのみやせん」よりも帥宮の厭世観を慰撫する意味合いが強いことから、「君のみぞせん」が『日記』所収「呉竹の」の原型と類推されるのである。「きみ」から「われ」に変じた改作の理由として、千葉氏は以下のように考察されている。

I 『日記』執筆時点での事実、すなわち帥宮の死に内容を則した。

II 『日記』には自称と他称との自由な行き来が見られる。

Iにみられる帥宮の死については、さきの清水文雄氏の論から「死の予感」の予兆として述べた通りである。現実には宮が亡くなり、そして『日記』を執筆している作者は、宮の死を作品に予兆としてあらわすことができる。帥宮不在の現在と、『日記』内における時空が心象的に交錯し、結果として帥宮の死を告げる予兆として表出したのである。この心情的な時空の交錯は、この場面以外にも見られる。例えば、木村正中氏は弾正宮への追慕の場面として始まる冒頭部の「夢よりもはかなき」を指摘されている。木村氏は、〈女〉の〈故宮〉への追慕の姿を「敦道への哀傷の思いも深く込められて」とし、帥宮を失った執筆時の心情を弾正宮への思いに交錯させていると述べておられる。このように、『日記』における心情的な時空の交錯は、〈女〉の哀傷を契機に作品に表出されているのである。

人は古来より人の運命をあらかじめ知り、そしてそれを掌握したがった。それは、ひとえに予知することで自己の運命を掌握できた気持ちになり、安堵するからである。それと等しく、帥宮のその後の運命を作者は『日記』の中で開示させた。死によって引き裂かれた二人の運命を、作品の中で予兆として再生産し、そのことによって宮喪失の慟哭の思いを客観的に捉えることができる。そして、その過程で作者は、〈女〉と宮との行く未来し方を内的真実として獲得しようとしたのではなかろうか。

IIについて千葉氏は、「〈われ〉という自称、〈きみ〉という対称が(『日記』における)和歌の中で果たしている役割は、〈われ〉でもなく〈きみ〉でもない、又同時に〈われ〉でもあり〈きみ〉でもあるという、いわば複合的人間像を指している」(括弧内の補足は稿者による。)として、その現象

は恋歌においてのみ指摘できる特徴であると考察されている。つまり、『日記』内の和歌贈答において、自称・他称が交換されており、各々の贈答が目指した叙情に大差はないということになる。これを「呉竹の」の贈答で見ると、「われ」と「きみ」が替わったところで、「ひとりで二人の思い出を語るのでしょうか、否、これから二人で生きていきましょう。」という、和歌全体が目指すところは変わらない。換言すると、「同じ心」を願う思いが、『日記』における人称の同化をもたらしたのだと言えよう。『日記』の作者は宮の無常観という散文部分で人の絶対的な孤独感を語っていた。ところが、「呉竹の」の和歌ではその孤独感を超克してゆくかのごとく、二人の「同じ心」をうたっているのである。

第一項で論じたように、「呉竹の」は『古今集』1003の壬生忠岑の和歌から引用されている。この歌は、紀貫之詠歌である前歌の1002を受けて詠まれたもので、ともに「呉竹の」の語を用いている。二首のその詞書には、「古歌奉りし時の目録の、その長歌」（1002）、「古歌に加へて奉れる長歌」（1003）とある。忠岑詠歌の「世々の古事」とは、昔からうたい継がれた多くの和歌群のことであり、例えば^{*19}『枕草子』にも「ふるきこと」のかたちで見られる（20「清涼殿の丑寅の隅の」）。帝や大納言伊周なども顔を揃える晴れがましい情景の場で、中宮定子が侍っている女房たちに「これにただいまおぼえむふるきこと一つづつ書け」と促す。清少納言はその場になぞらえたためたい古歌を引用して詠み、定子に賞賛されるというくだりである。このように、「古事」「ふるきこと」は中古では古歌を指す通念であった。貫之と忠岑はこれら古今の和歌を礼讃し、たたえ、その永遠の命を願っているのである。したがって、それをひいた『日記』の「世々の古事」の意味は、〈女〉と宮との和歌世界を思わせる数々の思い出のことであるといえる。

ここに、〈女〉の自負が強く感じられる。〈女〉は自分達の恋を「世々の古事」だと言っているのである。貫之も忠岑も『古今集』撰者であり、この名歌人の二人が「世々の古事」であり、褒め称え、永遠だとするものに、自分達の和歌的世界が育んだ愛情の数々をなぞらえているのである。〈女〉と宮は和歌贈答で愛を紡いでいったのだから、この「世々の古事」ほどふさわしい言葉はないだろう。「呉竹の」の歌の選択は、二人の最後の和歌として、最もふさわしいものであったとわたくしは思うのである。

『日記』の作者については諸論あるが、和泉式部その人ということに大方落ち着いているようである。また、わたくし

も和泉式部説を支持する者の一人である。和泉式部は稀有な歌人だけに、『日記』においてもまたエピソードの切り取り方が実に巧みである。和歌はみそひと文字のごく短い言葉の中に限られた時間・空間を切り取り、そこに永遠の叙情を込めるものである。和泉式部は宮との出会いから北の方の退出まで、彼女の全人生の中でわずか十か月のみを選び、切り取り、表出させた。その慧眼には感服するものである。

そして、そんな和泉式部が『日記』の最後に選び採ったのが「呉竹の」の贈答であった。宮の厭世観の吐露、そこには「同じ心」を求め合いながらもやはり孤独でしかない、人というもののはかなさが存在する。しかし、〈女〉はそれでも二人の愛がそれを導いた和歌のように永遠の命を持つようと願った。その願いが、『日記』の作者をして「呉竹の」の和歌を、宮と〈女〉の外的節目である宮邸入り前に置かせたのである。『日記』において、散文部分は人の持つ根源的な孤独感や悲しみにあふれている。「猶世の中にありはつまじきにや」という、作者のみが知り得る予兆が隠されている。そこに、「呉竹の」の和歌贈答がなされる。孤独感に対峙し、厳然と動かぬ予兆に背反するかのように、〈女〉はともに生きていく願いを高らかにうたい、そして日記の贈答は終わるのである。

和泉式部は和歌を愛し、そして和歌に愛された女性である。和歌が何よりも思いを伝え、願いを運ぶものだったということを、わかっていたのだ。

〈参考・引用文献〉

- * 1 清水文雄『和泉式部日記』（1941年7月）岩波文庫（本稿での『和泉式部日記』のテキストはすべて本書からの引用による。なお、本稿は横書きであるので、紛らわしさを避けるため、テキストの「く」「ぐ」はその読みに従うひらがな表記とした。）
- * 2 小町谷照彦「和泉式部日記 表現の論理」『別冊国文学27』（昭和61年1月）至文堂
- * 3 宮崎莊平「和泉式部日記のプロットとその構成」『日本文学27—7』（昭和46年7月）
- * 4 *2と同様
- * 5 小島憲之・新井栄蔵『新日本古典文学大系5・古今和歌集』（1989年2月）岩波書店
- * 6 鈴木一雄・円地文子『全講和泉式部日記』（1983年10月）至文堂
- * 7 森田兼吉①「敦道親王の結婚」『中古文学11』（昭和48年5月）、②「敦道親王とその父母—帥宮敦道親王伝の基盤として—」『文学・語学74』（昭和49年12月）、③「敦道親王の無常感と宗教的心情」『梅光女学院大学日本文学研究1

- 3』(昭和52年11月)等
- * 8 * 7の①と同様
 - * 9 秋澤互「『ゆかり』の文学としての『和泉式部日記』—故宮の存在意義をめぐって—」『活水日
文35』(平成9年12月)
 - * 10 * 6と同様
 - * 11 小松登美『和泉式部日記・下』(1985年9月)
講談社学術文庫
 - * 12 * 6と同様
 - * 13 * 1と同様
 - * 14 * 6と同様
 - * 15 清水文雄『和泉式部集・和泉式部続集』(198
3年5月)岩波文庫
 - * 16 千葉千鶴子「〈われ〉と〈きみ〉—『和泉式部
日記』試論—」『帯広大谷短期大学紀要20—1』
(昭和58年3月)
 - * 17 * 16、森田兼吉「一条朝の日記文学—『和泉
式部日記』の成立へ—」『源氏物語とその周辺の
文学研究と資料』(昭和61年5月)など
 - * 18 木村正中「和泉式部日記—主題の形成—」『別冊
国文学27』(昭和61年1月)至文堂
 - * 19 岸上慎二『校訂三卷本枕草子』(昭和36年4
月)武蔵野書院